

## 「孫子」等の兵法理論が、漢方医学に与えた影響

権藤 寿昭

ごんどう外科胃腸科クリニック

東洋医学の内容・原理を他の分野である思想・哲学などの観点から検討するといったことは、決して珍しい事ではなく、例えば儒教つまり孔子や孟子の思想、または『易経』や、道教、仏教といった宗教的のものゝ観方からなど、少なくない実例があった。中でも意外に思われる方も多いと思われるが、兵家の思想つまり軍事理論を医学の原理に適用する試みも、元来多数派ではないが、確実に存在していた。その影響かと思われるが、我々が普通に使っている用語（特に、漢方医学関連）で、例えば“邪正闘争”、“治療戦略”、“攻裏剤・和解剤”など明らかに兵家の影響を窺い得る用例がある。兵家も古来諸派が多く存在したようで、その中でよく知られた七派、所謂「武経七書」の一つである孫武の著作『孫子』が、その内容の特性、つまり単なる戦闘技術に偏らない、非好戦性の考えに基づいた開戦前の外交・軍議の重視、已むを得ざる開戦後は早めの戦争終結を優先した方法を採用といった特徴から、単なる軍事解説書の地位を脱して、他の分野にも使い回し可能な戦略の書としての地位を有している。当然兵家の医学理論への応用といった試みも、『孫子』を用いて最も多くなされてきた。孫武（春秋時代・斉国の軍事理論家。呉国に仕えた。紀元前510年代頃『孫子』を著す）は、諸子百家上「兵家」の類に属し、十三編からなる兵法書が、一般に『孫子の兵法』として今日伝えられていて、（予断ですが、この事にはあの三国志で有名な曹操の寄与が大きく、自ら注釈も書き記している。）「兵家」の中では、古今東西最も多く読まれている。約2500年前に著されたこの著書は「兵家」中、古今東西のベストセラーであり、中国・日本だけでなく、清朝前半期に清国で布教活動をしていたフランス人牧師フランシス・ワンによって仏訳されたのをきっかけに、欧米の君主・軍略家にも愛読されて（ナポレオン等）、現在でも多くの国の国防方面のみならず、ビジネス界にまで戦略の参考書として、広く読まれている。この『孫子』の理論・理念を医論に当てはめて論じた代表的な医学者の一人に、清朝前期の江蘇・呉江の人である徐大椿（字：靈胎）1693～1771が挙げられる。上記のフランス人牧師フランシス・ワンが清国内で布教活動をしていたのとはほぼ同時代に、臨床・研究に活躍した医学者であり、本業以外に才能を示した兵法・格闘技の研究・実践が医学理論と、兵法理論（特に『孫子』）との融合・関連付けという興味ある業績を残し、代表著書である『医学源流論』の主テーマとなっている。徐大椿は『医学源流論』中の論文「用藥如用兵論」の最後に、「孫武子十三篇、治病の法之に盡きる。」と、明言している。

徐大椿以前にも、医学理論を兵法理論と結び付けて説明し、臨床に応用した例は少なからずあり、先ず中医学の定番のテキストで最古の文献である『黄帝内経』や、『難経』・『傷寒論』・『金匱要略』。後の時代の孫思邈（唐）の『千金要方』、張景岳（明）の『景岳全書』等があげられる。また、中国だけではなく本邦においても江戸時代以降、現代に至るまで、このテーマに言及された先哲がいて、それも紹介の予定である。当演題では、更にその他の『孫子』以外の兵法書にも言及の予定で、特にドイツ（プロイセン）の、クラウゼヴィッツによる『戦争論』（Vom Kriege）は興味深く、これも深読みすると医論に関連付け可能な箇所があると思われる。そして、以上のテーマは現代医学にも応用可能な原理と思われる所が在り、最近のトピックスも含めて若干紹介する予定である。